高齢者の余暇活動を誘引する社会的ネットワーク
—鹿児島県国分市の高齢者大学を事例として—

河　原　晶　子

高齢者の余暇活動に関しては大都市の都市型社会における調査研究が多いが，本稿は都市化が進みつつある地方小都市の事例を取り上げている。1人暮らしや夫婦のみなど高齢者のみ世帯の比率が高い一方で，工業化の著しい鹿児島県国分市の高齢者大学受講者を対象とする余暇活動と社会関係の調査を通じて，高齢者の余暇・趣味活動の活発な実態と，近隣関係・友人関係ともにきわめて親密であり，豊富な社会的ネットワークを張り巡らせている実態が明らかになった。分析を通じて得られた知見は，①地域空間の変動が著しい都市部と，過疎と高齢化の著しい農村部という格差の大きい地域を抱えた国分市であるが，都市部・農村部を問わず趣味活動は豊かである。②友人関係の豊かさ，特に友人数の多さが余暇・趣味活動の活発性と密接に結びついており，都市部の男性にこの傾向が顕著である。③これに対し，近隣関係・交友関係ともに親密な都市部の独居女性では，余暇・趣味活動水準の相対的な低さと，活動的な層と非活動的な層との二分化が目立つ。これについては，彼女たちにおける近隣関係から友人関係へという社会的ネットワークの比重移動の過程にある，という推測がなりたつ。

キーワード：高齢者の社会参加／余暇・趣味活動／社会的ネットワーク／都市化社会

はじめに

国民の生活水準が向上し，公衆衛生の充実と医療技術の進歩も相まった結果，今日，日本人の高齢期は長期間化し，健康な高齢者は増加している。高齢社会が意味するのは,「保険あって介護なし」の懸念をはらみつつ，ようやく開始する介護保険制度に象徴されるように，確かに，虚弱高齢者や要介護高齢者の増加であろう。しかし，地域に暮らす圧倒的多数の高齢者は相対的に元気な人々である[1)]。生産力の未曾有の高まりの中で迎える高齢社会とは，就業の重石から基本的に解放された元気な高齢者が多い社会である。介護システムの充実と合わせ，高齢者が自由時間という資源を豊かで健康的な余暇活動に費やし，それを通じて社会の諸関係に参加していける，ということもまた，高齢社会に不可欠な条件である。

わが国の高齢化率が急上昇し始めた1980年代から，政府・自治体により強調さ

れてきた高齢者の社会参加奨励政策は，もともとは高齢者の社会的貢献活動を引き出すことによる，社会的コスト抑制を狙ったものであった。しかし，家族規模の縮小と１人暮らし高齢者や高齢夫婦世帯の急増，家族意識・生活スタイル・職業と就業形態などにおける世代差の拡大などに見られるように，わが国の高齢者を取り巻く家族環境は，予想を超えて短い期間のうちに歴史的な変動を見せた。今日では，高齢者が，三世代同居の家族において「子や孫に囲まれた静かな余生」を理想とすることは，もはや現実にそぐわないものになっている。高齢社会においては，家族内役割のみではなく多様な社会関係を通じて豊かな余暇活動を享受することは，高齢者自身の自然な要求になり得ると共に，そのような活動能力や社会関係形成能力を高齢者が培うことも求められるのである。

従来，広く高齢者の「社会参加」というテーマの下に，高齢者の集団参加，家族・親族や近隣・友人のネットワーク，仕事や社会的活動，余暇活動などが数多く研究されてきた。そのために試みられる調査は，成熟した都市型社会，特に大都市の高齢者を対象とするものが多かったように思われる[2)]。これに対し都市化の過程にある地方都市における，高齢者の余暇活動や社会的ネットワークなどの実態は，よく調査されてきたとは言い難い。

地方都市の場合，「都市」とは言いながら１つの自治体区域には市街地地域と農村地域が融合し難く混在していることが多い。そして，高齢者の社会的環境や生活条件という点では，この２種の地域は性格がかなり異なるので，調査区域として一括することも，高齢者の実態把握の上では問題を抱えている。このように考えると，地方都市の高齢者の社会参加の実態については，未解明の部分を大きく残していると言えよう。

本稿は，筆者が鹿児島県国分市で行った高齢者調査に基づくものである。鹿児島県は高齢者の３世代同居率がもっとも低い県であり，世帯規模が小さく，高齢者の１人暮らしや夫婦のみ世帯の比率が全国的にも高い県である[3)]。高齢社会における家族形態の諸傾向を先取りするかのようなこの特徴は，国分市でも例外ではない。しかも同市は，遅れてやってきた工業化が急速に進んでいる都市であり，現在の高齢者を取り巻いて農村コミュニティ的特徴の色濃かった社会関係が，変容を避けられない状況にある地方小都市である。

本稿では，国分市における高齢者の余暇活動の実態，及び高齢者の社会関係がその余暇活動に及ぼす影響を明らかにすることを課題とする。その際，特に，高齢者の余暇活動における都市部・農村部という一自治体の中での居住地の差，また，高齢者の余暇活動における性差に注目したい。高齢女性の方が男性よりも多

数であり，特に独居者では女性の方がはるかに多いことは，統計上も明らかである。性差を無視して「高齢者」として一括りすることは，実態の正確な把握の妨げになると考えるからである。

1．調査概要

1）調査地域（国分市）の概要

鹿児島県国分市は，鹿児島湾の最北端に接し，人口５万人（1995年国勢調査）を擁する，商・工業の盛んな県中部地域の中心都市である。1954年から55年にかけて１町４村が合併し，1955年に人口３万５千人で同市は誕生した。その後，1970年までの高度経済成長期には，地方小都市の例に漏れず市の人口は減少の一途をたどっていた。70年代に入り県中部への鹿児島空港の移転と並行して，京セラ国分工場（72年，従業員130人で操業開始し，97年現在4,800人。）やソニー国分（74年，従業員117人で操業開始し，97年現在2,800人。）といったハイテク関連の企業が市内で操業を始め，それに伴って人口もようやく増加し始めた。1984年には「国分・隼人テクノポリス」の地域指定を受けている。現在は，鹿児島市とその周辺地域を別として，県内ではなお人口減少する都市が多いが，国分市はその中で増勢を維持している商・工業都市である。

全国的に高齢化率が急上昇する前の1975年には，国分市の高齢化率はすでに全国（7.9%）や鹿児島県（11.5%）よりも高い12.5%であった。しかし，企業進出とそれに伴う人口増加が始まるにつれ，高齢化の速度は落ち，75年時と同水準の高齢化率が1990年まで保たれてきた。90年代に入ってようやく，市の高齢化率は上昇し始めたのだが，全国や県の高齢化水準がさらに急上昇しているため，市のそれは両レベルと比べてもなお低い。1995年の高齢化率は国14.5%・県19.7%に対し，国分市14.3%であるが，県内14市の中では同市は鹿児島市の13.4%に次ぐ低さである。

言うまでもなく国分市の高齢化率の相対的低さは，京セラやソニー国分の従業員とその家族の転入や，大学・自衛隊駐屯地の存在による若者の増加によりもたらされたものであり[4]，その背後に中山間集落や市街地の高齢化は隠されている。高齢化率の市内における地域間格差はきわめて大きい[5]。

2）調査概要

今回の調査は国分市「舞鶴大学」受講生を対象にしたものである。舞鶴大学と

は，1966年から行われている市の高齢者教育事業である。老人クラブを通じて入学申し込みをするため，事実上老人クラブ会員を対象とした事業となっている。「大学」は，毎年５月にスタートし，毎月１回，暮らし・健康・福祉・高齢者の役割・郷土史などを内容とする学習活動や，研修旅行・小学生との交流活動などの行事を行っている。近年は老人クラブ加入者数の停滞もあってか，受講生は減少気味であるが，それでも全高齢者の１割強に当たる900人にのぼり，国分市の高齢者が最も多く参加する事業となっている。受講者は全市にわたるが，高齢者の多い中心市街地地域では，老人クラブ加入者自体が少なく，受講生も少ない。また，60代の高齢者の受講も多くない。受講者の中心は，いわば老人クラブ会員の中でも相対的に元気な高齢者であると言えよう。

調査はこの舞鶴大学受講者を対象として，1999年６・７月の大学開講日に会場で調査票を配り，講話の後に記入してもらう集合調査の形で行った。２日間の出席者666人中590人が回答し，有効回答数540，無効は50，出席者に対する有効回答率81.0％であった。

今回は国分市の高齢者調査としては始めての試みであった。後期高齢者が多いという受講生の年齢を考慮して質問数は限られていたため，パイロット的性格を持つ調査と位置づけて実施した。なお，データの集計・分析には統計用ソフトSPSS9.0を使用した。

３）回答者の概要

表１：回答者の概要

項　目	構　成　比（単位：％）
性　別	男性31.3／女性68.7
年　齢	65～69才11.2／70～74才30.5／75～79才31.4／80～84才19.1／85以上7.8 平均76.14才／男性平均76.8才・女性平均75.8才／中央値76.0才
家族形態	独居33.2(男5.8：女94.2)／夫婦47.2(男49.6：女50.4)／ 子一家と同居17.9(男31.2：女68.8)／その他1.5
最長の職業	農業41.9／自営業6.4／事務職16.2／技能職9.6／教員・専門職技術職9.2／ 主婦16.7
居住期間	10年未満5.2／10～24年18.0／25～44年22.2／45年以上54.5
居　住　地	都市部34.8(男36.8・女63.2)／農村部65.2(男28.1・女71.9)
健康状態	まあまあ健康71.0／無理はできない25.6／病気がち3.5
経済状況	十分ゆとりあり10.5／何とかやっていける79.5／楽ではない10.0
勤労状況	働いている32.6／働いていない67.4
仕事の頻度	週１～２回28.0／週３日以上59.1／月１～２回8.5／その他4.3

舞鶴大学受講者の７割が女性だが，回答者も７割近くは女性である。74歳までの前期高齢者が41.6％，75歳以上の後期高齢者が58.4％で，70代が回答者の中心だが，80代の人も４分の１を占める。家族形態では，夫婦が最も多く，独居と合わせた２形態で回答者の８割を占め，子や子の一家と同居する人は18％にすぎない。男性では夫婦が74％でもっとも多く，女性では独居が46％，夫婦が35％である。独居者の中で女性は94％を占めており，男性は極めて少ないが，これは独居男性の舞鶴大学受講が少ないためであろう。以下の分析では，独居男性はデータ数が少ないため比較・考察の対象からは除外している。なお，家族形態に居住地の差は認められなかった。

最も長く就いた仕事では，農業が４割を越えて最も多い。性別で見ると，農業従事者の80％，自営業の59％が女性であるのに対し，技能職では男女同比，事務職では男性が61％，教員や専門職技術職では男性が80％となっており，職業歴の性差が明瞭である。女性の４分の１が専業主婦であった。現在地での居住期間では，高度成長の開始期であり国分市の市制施行年である1955年より前からの居住者が54％と，半数以上である。国分市の人口減少期である高度成長期（1955～74年）からの居住者は22％，人口が増加し始めた1975年から最近10年までの居住者が18％，10年未満の居住者が５％である。

暮らし向きについては，８割が「贅沢しなければ何とかやっていける」であった。健康状態は７割が「まあまあ健康」であり，３分の１の人は現在も働いている。就労率の高いのは60代は当然としても，80代前半の人も高い。就労と経済状況には関連が認められず，働いている人が生活にゆとりのない訳ではない。また，仕事の目的でも，「収入目的」が16％，「能力を活かす」「人と会える」「人の役に立てる」「健康のため」等，「収入目的」以外が84％であり，「仕事の目的」と経済状況にも関連がない[6]。

回答者の所属する公民館区について，国分市内でも市街地化や宅地化が早くから進んだ区を［都市部］，その他の区を［農村部］に分けてみると，［都市部］に属する人は35％，［農村部］の人は65％である。都市部では男性の比率が高く，事務職・教員・専門職技術職などの雇用労働経験者が45％を占め，農業経験者は22％に過ぎない。農村部では女性が多く，過半数の52％が農業経験者だが，雇用労働経験者も30％いる。

2．余暇・趣味活動の実態

高齢者の余暇・趣味活動として，学習・文化・教養の諸講座への参加経験の有無，および趣味としている活動の2項目を取り上げた。諸講座への参加は余暇利用の一形態ではあっても，趣味活動そのものではなく，講座という集団的な場に参加していなくとも，豊かな趣味活動を享受している人はいる。しかし，一般的には，講座等の集団的な活動に参加していくことは，個人の活動性と社会的関わりへの志向の強さを表すものと言うことができる。以下では，諸講座への参加状況と趣味に表れた余暇活動の実態を述べる。

1）講座参加状況

諸講座への参加の有無では，国分市中心部で開催されている学習や趣味の講座への参加経験の有無を，具体的な講座名を挙げて質問した。列挙した講座名は，一般市民対象の［国分市公民館講座］・市視聴覚センターの［生涯学習講座］・市総合福祉センターでの［趣味クラブ］・［男の料理教室］・［ボランティアグループ］・県主催の［高齢者中央大学講座］・県社会福祉協議会主催の［ときわ木学園］・［大学公開講座］の8種類であり，無記入者を「参加経験なし」と見なした。結果は表2の通りである。

表2：講座参加状況

項　目	内　　容（単位：%）
講座参加	参加経験あり44.6／参加経験なし55.4
参加講座*	公民館講座52.3(23.3)／福祉センター・趣味クラブ22.8(10.2)／ボランティアグループ17.8(7.9)／県社協ときわ木学園15.3(6.8)／大学公開講座12.4(5.5)(上位5講座)
参加講座数*	1講座67.2(30.0)／2講座19.9(8.9)／3講座以上12.9(5.7)／平均参加数1.5講座

*数字表記は，参加経験者での比率（全回答者での比率）となっている。

表3：講座参加経験者の概要

項　目	内　　容（単位：%）
性　別++	男性の60.8／女性の37.4
居住地+	都市部55.9(男の76.6・女の43.6・性別++)／農村部40.2(男の50.0・女の36.6・性別+)
最長職++	農業者の32.1／自営業・事務職・技能職・主婦の52.8／教員・専門職・技術職の79.1
交通手段++	自分の車40.8／人の車・タクシー17.6／自転車・バイク21.5／バス11.2／徒歩9.0

+はχ^2検定の危険率5%以下，++は0.1%以下である。

表4：男女別の市役所等への交通手段（単位：%）

	自分の車	人の車・タクシー	自転車・バイク	バ　ス	徒　歩	計++
男性(N=169)	72.2	6.2	16.0	2.5	3.1	100
女性(N=371)	10.0	30.3	24.4	24.9	10.3	100
計	29.7	22.7	21.7	17.8	8.0	100

++はχ^2検定の危険率0.1%以下である。

講座参加経験者の概要を見ると（表3），明らかに参加経験率の男女差・居住地と職業歴による差がある。これに対し，家族形態による差は認められなかった。

都市部と比べた農村部の参加率の低さ，他職業と比べた農業従事者の参加率の低さが目立つが，その理由の1つは，質問で列挙した講座等が市中心部で開催されるものに限られ，農協などで行われている講座や学習活動は含まれていないことがあると思われる。しかし，農村部男性の講座参加率は5割であり，都市部女性のそれより高い。要するに女性の講座参加率が低いのである。これはなぜだろうか。

考えられるのは，諸講座への参加とは「家事遂行を一時的に留保して，自己の楽しみのために外出する」こととという受け止めが根強く存在していることである。これが，この世代の女性達が公然と諸講座に参加することを妨げていたのではないだろうか。

もう1つの理由は，交通手段である。諸講座の会場は市内の中心部にあるので，遠方地域からの講座参加には，交通手段確保の必要という問題がついて回る。自宅から市役所や公民館などへ行く交通手段では，男性の9割近くが［自分の車］や［自転車・バイク］等，自分が自由に使える交通手段を持つ。これに対し女性では，同様の［自分の足］を持つのは34%に過ぎず，逆に［他人の車・タクシー］など，交通手段において他者に依存せざるを得ない人が30%となっている（表4）。若い前期高齢者であっても，女性の中で［自分の車］を利用する人は2割に満たない。女性ではこのように市中心部へ自由に行ける交通手段を持たない人が多いことは，女性の講座参加経験が少ないことの背景を示している。誰かの車に乗せてもらわねばならない不自由さは，定期的かつ頻繁にある諸講座への参加を阻害する十分な要因の1つであろう。事実，女性の中でも「自分の車」のある人の60%は講座参加者であり，また，男性の中でも［自分の車］や［自転車・バイク］の人の講座参加率は，より高いのである。

2）趣味活動の概要

表5：趣味活動の概要

項　目	内　　容
趣味活動率	有趣味87.2%／趣味なし12.8%
趣　味　数	1個21.9%／2個22.6%／3個13.7%／4～11個29.0%／最多数11個・平均2.65個
性　　別++	男性有趣味率95.2%・女性有趣味率83.6%／男性平均3.39個・女性平均2.38個
居住地別	都市部有趣味率90.4%・平均3.28個／農村部有趣味率87.9%・平均3.10個

++はχ^2検定の危険率1%以下である。

表6：上位6位の趣味活動と有趣味者比率（単位：%）

	全　体		男　性		女　性	
1.	ゲートボール等	46.1	ゲートボール等	63.2	ゲートボール等	38.8
2.	野菜作り	35.5	野菜作り	39.1	野菜作り	33.9
3.	旅行	26.1	園芸	29.1	旅行	25.7
4.	園芸	19.2	旅行	26.5	手芸	16.4
5.	読書	15.4	読書	24.1	園芸	16.2
6.	カラオケ	14.2	スポーツ観戦	19.8	カラオケ	12.8

趣味活動の具体名を可能な限り列挙して，1人またはグループで楽しんでいる活動をすべて選んでもらった結果，自由記入も含めて52種類の余暇・趣味活動が挙げられた。無記入者を「趣味のない人」と見なした。表5の通り，有趣味率・趣味数とも非常に高い。

全国的な余暇活動調査では，①一般に，都市では娯楽や趣味活動の環境がそろっているので，都市住民の方が趣味活動の比率は高い，②青年期をピークとして年齢の上昇とともに活動者率は低下し，それが一層減少するのが高齢期である，③高齢期には男性の方が女性よりも趣味活動率が高い，とされている[7]。これらと比較しながら国分市の特徴を概観すると，次のようになる。

第1には，［ゲートボール・グランドゴルフ］（以下，［ゲートボール等］とする。）は全体の46%が，［野菜作り］は43%が趣味としており，両者は際だって高い人気を見せていることである[8]。

［ゲートボール等］あるいは［野菜作り］のみ，もしくは［ゲートボール等と野菜作り］のみを趣味とする人を除くと，全体の趣味活動率は71%に下がる。この2種の活動が国分地域の高齢者の趣味活動の中で重要な位置を占めていることがわかる。趣味活動としての［野菜作り］が多いのは，農村部居住者や農業者で

は，従来まで仕事として続けてきた野菜作りが，高齢期において［趣味］と一体化した状況があること，農地の間を縫って市街地化されてきたため，都市部でも自分の田畑の近い人や，家庭菜園が持てるような土地区画の広い住宅も多いことなど，国分地域の都市部・農村部に共通する地域性を反映しているものと思われる。また，［ゲートボール等］が多いのは，回答者のほとんどがゲートボール等に参加する機会の多い老人クラブ加入者であるためと思われる。それにしても，この活動は男女とも有趣味率の第１位であるが，とりわけ男性が際だって高く，男女差も大きい。高齢者が地域でゲートボール等に興じているのが目立つとしても，実のところその多くは男性高齢者なのであろうか。

特徴の第２は，農村部の高齢者における趣味活動の豊かさである。上記のように全国的には農村部の方が活動率は低いとすれば，都市部と農村部に有意差は認められないという今回の結果には，むしろ農村部での趣味活動の豊かさが表れている。絵画・陶芸・各種の趣味工芸・パソコンや，山登り・ジョギングなど，都市的と思われる活動が，農村部の高齢者の方にむしろ多かったのである。

特徴の第３は，高齢期においても，加齢と共に趣味活動状況は変化している，ということである。前述の全国的調査での②の傾向では，若年期・壮年期との比較のため一括りされた高齢期において，活動の縮小が指摘されていた。しかし，今回の調査では，趣味数も活動分野も加齢に伴って変化しており，高齢期全体を通じて見ると，必ずしも一直線の縮小はしないことがわかった。むしろ年齢別では，60代よりも70代の人の方が有趣味率が高く，趣味の個数も多いのである。

第４の特徴は，男女とも趣味活動は豊かであるが，確かに男性の方が有趣味者率も趣味数も多く，趣味活動の分野も微妙に異なるということである。第３・第４の特徴は，次項で詳述する。

３）趣味類型と活動状況

表７：趣味活動類型別・性別の有趣味者比率（単位：％）

	健康型++	文化型	娯楽型++	スポーツ型*	教養型**
男性	70.5	64.5	60.8	21.7	51.2
女性	45.5	60.9	43.3	16.1	44.3
全体	53.3	62.0	48.8	17.6	46.4

++はχ^2検定の危険率１％以下である。

*ゲートボール等を除く健康型活動。 **野菜作りを除く文化型活動。

表８：趣味活動の類型別の相関係数

	文化型	娯楽型	講座参加	教養型	スポーツ型	ゲートボール
健康型	0.007	0.202++	0.096+	0.005		
文化型	1.000	0.137++	0.112++		0.094+	−0.041
娯楽型		1.000	0.169++	0.132++	0.181++	0.147++
講座参加			1.000	0.193++	0.143++	0.081
教養型				1.000	0.119+	−0.051
スポーツ型					1.000	0.099+

+は危険率５％以下，++は１％以下である。

個々人が具体的に挙げた趣味活動の動向を捉えるために，趣味活動を［健康型］・［文化型］・［娯楽型］の３類型に区分してみた（表７・８）。以下は，各類型ごとの特色である。

①［健康型］

［健康型］（ゲートボール等・ジョギング・ウオーキング・体操・山登り・ハイキング・ソフトボール等の球技・水泳など）の有趣味率は53％だが，ゲートボール等を除くと（スポーツ型），18％に止まる。ジョギング・ウオーキング・山登り・各種球技はどちらかと言えば男性に多いのに対し，女性では体操が多い。この類型の有趣味率の男女差が大きいのは，ゲートボール等が明らかに男性に偏っていることに起因する。この型の趣味を持つ人は，文化・教養的趣味からは少し縁遠く，特にゲートボールを趣味とする人にはこの傾向が強いようである。

②［文化型］

［文化型］（野菜作り・園芸・読書・手芸編物・書道等々多種類にわたる。）の有趣味率は62％にもなるが，野菜作りを除いた（教養型の）有趣味者率は46％である。男女の有趣味者率の差がほとんどない唯一の活動である。野菜作り・園芸が最もポピュラーだが，読書に親しみ，書道や俳句・短歌などの創作活動も多い。伝統的な稽古事や趣味であった茶道・生け花を趣味とする人はごくわずかであり，陶芸・写真・ビン細工・ちぎり絵・竹細工・木彫り・押し花・絵画等，多彩で新しい趣味工芸やパソコンが楽しまれている。園芸・読書・書道・写真・日曜大工は男性に多く，手芸・文芸創作・和洋裁・邦楽は女性に多い。そして［文化型］の中でも，特に野菜作りを除く［教養型］活動を楽しむ人は，諸講座によく参加している。

③［娯楽型］

［娯楽型］の活動（カラオケ・旅行・ドライブ・スポーツ観戦など）は，有趣

味率・趣味の種類とも男女差がはっきりしている。カラオケ・旅行・各種催し物・外食などが，男女共通の娯楽であるのに対し，パチンコ・釣り・ドライブ・飲み会・スポーツ観戦・囲碁将棋を趣味とする人は男性の方が多い。男性の娯楽は種類が多く，そしてパチンコ・釣り・スポーツ観戦など１人でも楽しめるものが多いが，女性の娯楽は，旅行や外食・カラオケ・催し物など最近になって高齢者の間で普及してきた，それも仲間で楽しむものが多いことが特徴である。この年代の女性が１人で公然と娯楽を楽しむことや，楽しめる娯楽はまだ少ないこと，そのような風潮の中で，女性たちが友人・近隣どうしで連れだって外出し，旅行や外食・カラオケ等を楽しんでいる様子がうかがえる。また，［娯楽型］活動への参加は，他類型のどの趣味活動とも相関している（表８）。このことは，回答者が，［スポーツ型］あるいは［教養型］など参加者の好みが特定される趣味活動だけを享受するのでなく，友人知人と集う娯楽も十分に楽しみ，いわば娯楽的活動が他類型の活動と活動仲間の間で橋渡しの役割を果たしていることを示す。そしてこの「橋渡し」機能という点で［娯楽型］は，［文化型］や［教養型］活動との関連の弱いゲートボール等に勝っている。

④加齢と趣味活動の変化

今回の調査項目で判明する限りでの年齢別活動状況は，人々の趣味活動歴の傾向そのものではないが，加齢に伴う趣味活動の変化を伺わせてくれる。まず趣味数では，若い60代よりも70代の方が多いのが，85才を越すと大きく減少している。

趣味活動の内容の変化を有趣味者率の変化で見ると，ゲートボール等の有趣味率は年齢による変動がほとんどないのに対し，その他スポーツ活動は加齢に伴って減少しており，全体としては，70代半ばを越えると［健康型］活動の有趣味率は低下する。体力の低下による［スポーツ型］活動からの後退を，ゲートボール等がカバーしていると言える。［文化型］の有趣味率は60代が最も低いが，70代に入ると大きく上昇する。85才を越えると野菜作りをする人は目に見えて減少するが，それに代えてその他の［教養型］活動は最も盛んになる。これに対し［娯楽型］では，60代が最も高い有趣味率が，加齢と共に減少していく。それでも80代前半までは，５割近くが娯楽を楽しんでいる。

男性の場合，上記３類型の活動がそれぞれ年齢によるピークを持っている。60代男性の主要な趣味はゲートボール等と［娯楽型］活動であり，特に［娯楽型］の有趣味率は84％にもなる。70代前半になると［娯楽型］は急落し，代わって，ゲートボール等に他のスポーツ活動を加えた［健康型］が79％のピークを作っている。70代後半になると野菜作りを楽しむ人が増え，それを含む［文化型］活動

図１．年齢別有趣味者率・男性

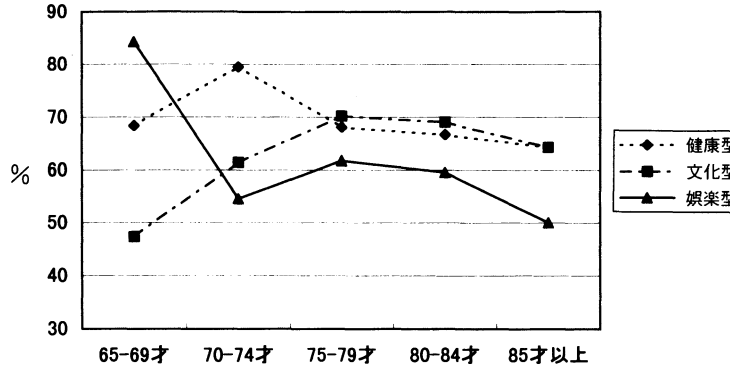
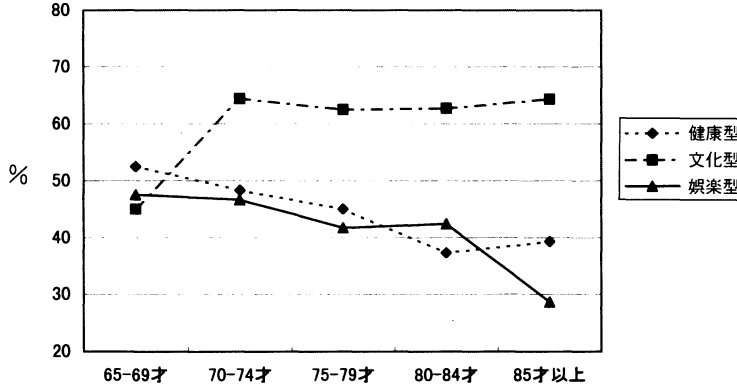


図２．年齢別有趣味者率・女性



が70％のピークとなって，以後は［教養型］を除く全類型で有趣味率は緩やかに減少していく。女性の場合，年齢による際だったピークは見られず，［健康型］と［娯楽型］が60代を最高の有趣味率として，以後は類似の曲線を描きながら次第に低下し，逆に60代で最も活動率の低い［文化型］活動が70代に入ると大きく増え，以後も趣味活動の主要な分野となっている。

以上から，70代は趣味の数・活動分野ともに，高齢期の趣味活動がまさに花開く時期であることがわかる。また，比較的に若い60代，特に男性では外出して楽

しむ活動が多い娯楽が重要な位置を占めるが，70代以降は急減していることは，娯楽の豊かさのみに老後の余暇活動を依存することの危険性を示唆する。活動力が低下する70代・80代になっても趣味活動を享受できることが豊かな高齢期の1つの指標とするなら，娯楽と共に，家庭で1人でも楽しめる文化的な趣味活動を持っておくことが必要になろう。

3．社会的ネットワークの状況

都市部・農村部を問わず，1人暮らしや夫婦世帯の高齢者の多い地域では，親族・近隣・友人などの社会関係の網の目，すなわち社会的ネットワークは，高齢者が地域で自立的に暮らしていくための不可欠の条件である。同時に社会的ネットワークには，高齢者の余暇や趣味における活動を引き出し，活動を通じてさらにその社会関係を豊かにする，という機能が期待される。従って，社会的ネットワークが高齢者の活動性とどのように結びついているのか，の解明が重要になる。今回の調査では，質問数の関係から社会的ネットワーク関連の質問は近隣関係と友人関係の量的側面に限定し，その特徴を概観する。

1）近隣関係

近隣づきあいの程度は，［よく行き来する］49.9%・［時々行き来する］31.1%・［会えば世間話］14.2%・［会えば挨拶程度］4.6%・［つき合いなし］0.2%である。近隣関係のこの5段階評価は各地の調査でよく利用されているので，比較するため今回も使用したが，上記の通り［よく行き来する］と［時々行き来する］に回答が集中している。各種の都市高齢者の近隣関係についての調査結果と比べると，回答者の近隣づきあいは全体としてきわめて親密であることをまず指摘しておく[9]。

そこで，［よく行き来する］を［近隣親密型］に，［時々行き来する］を［近隣標準型］に，［会えば世間話］・［会えば挨拶程度］・［つき合いなし］を併せて［近隣淡泊型］に区分した。3区分による国分地域の近隣関係の特徴的傾向は，以下の通りである[10]。（表9）

①都市部の近隣づきあいは，農村部に劣らず親密である。

常識的には都市部より農村部の方が，近隣づきあいは親密であろう。農村部での近隣関係が親密なのは，まずは，近隣地域における農業という就業の共通性・長期間居住の共通性・生活経験の共通性などによる。同時に，過疎の中で高齢化と家族規模の縮小が進み，1人暮らしや夫婦のみの高齢者世帯が農村部の多数と

表９：近隣関係の程度（単位：％）

区　分	項　　目	親密型	標準型	淡泊型	平均値*
全　体		49.9	31.1	19.0	2.71
居住地	都市部(N＝188)	50.9	26.0	23.1	2.28
	農村部(N＝352)	49.7	32.4	17.9	2.32
都市部+	男性　(N＝ 69)	35.9	29.7	34.4	2.02
	女性　(N＝119)	59.4	24.5	16.0	2.43
農村部	男性　(N＝ 99)	39.6	41.8	18.7	2.21
	女性　(N＝253)	53.3	29.3	17.5	2.32
女　性	都市部独居(N＝ 54)	60.8	23.5	15.7	2.45
	都市部夫婦(N＝ 91)	51.4	28.6	20.0	2.31
	農村部独居(N＝325)	55.0	28.0	17.0	2.38

+はχ^2検定の危険率５％以下である。 *数字の大きいほど親密度が高い。

なった今日では，高齢者どおしが日々，相互に声を掛け合い訪問し合うことは，彼らが無事に日々を過ごすための不可欠の条件になっているためと思われる。ところが今回は，この「常識」にもかかわらず，都市部と農村部では近隣づきあいの程度に有意差はないという結果がでている。これは，調査した農村部の近隣づきあいが浅いのではなく，都市部が予想以上に密接なのである。

②都市部の１人暮らし女性の近隣関係は，最も親密である。

女性は男性よりも近隣づきあいが親密であることが確認される。これをもう少し詳しく見ると，女性の場合は居住地による差はほとんどなく，むしろ，都市部の方が農村部よりも親密と言ってもよい傾向が見られた。一方，都市部の男性は標準型が最も少なく，親密型と淡泊型の両極に分化する傾向がある。これに対し農村部の男性には標準型が最も多い。農村部の男性の近隣づきあいは，親密な中にも「とことんまで入り込みはしない」関係であろうか。こうしてみると，①で述べた都市部の親密な近隣関係は，都市部の女性，特に［独居］女性の近隣づきあいが非常に親密であることに起因している。都市部の［独居］女性は都市部の［夫婦］女性よりも，また農村部の［独居］女性よりも近隣関係は親密である。

２）　友人関係

友人数については，実数を直接質問した。平均友人数8.39人と，回答者の友人数は全体として多いが[11]，０人から最大値150人までばらつきが甚だしい。そこ

表10：友人数（単位：％）

		0人	1～3人	4～9人	10人以上	平均友人数*(人)
全　体		7.9	22.7	37.1	32.3	1.94
性　別+	男 性	6.2	20.5	33.5	39.8	2.09
	女 性	8.9	24.3	38.5	28.3	1.85
都市部+	男 性	1.6	24.2	22.6	51.6	2.24
	女 性	5.0	30.0	37.0	28.0	1.88
農村部	男 性	6.7	18.9	41.1	33.3	2.01
	女 性	10.1	22.6	38.5	28.8	1.86

+はχ^2検定の危険率5％以下である。
*0人・1～3人・4～9人・10人以上の4区分で再集計した区分数値の平均。数値の大きい方が友人数が多い。

表11：クラマーのV係数による交友頻度*の相関

	性 別	家族形態**	居住地	都市部家族形態**	都市部性別	農村部性別
V係数	0.152+	0.157+	0.137+	0.243+	0.142	0.201+

+は危険率5％以下である。
*「週1，2回以上」「月1，2回」「2，3カ月に1回程度以下」「友人なし」の4区分。
** 独居と非独居の2区分による。

で，回答を［友人なし］・［1～3人］・［4～9人］・［10人以上］に区分し，再集計した。友人数と性差は有意関連しており，男性の方が友人数が多い。特に，友人［10人以上］が5割を超える都市部の男性と，［友人なし］が1割ある農村部女性との差は大きい（表10）。

最も親しい友人とのつき合いの頻度では，［週1，2回以上］の交流が54.7％に達し，［月1，2回］は25.3％，［2，3ヶ月に1回程度以下］が12.6％で，交友頻度の高い人が多い。交友頻度には性差があり，友人数では男性よりも少なくとも，親しい友人との交流は女性の方が頻繁である。そして，女性の中でも［独居］女性の交友は頻繁である。

居住地別に見ると，都市部では男性の交友頻度は女性に劣らず高く，女性では［独居］女性の交友頻度が高い。都市の［独居］女性は，友人数は少なくとも，緊密な交友関係を維持しているようである。これに対し農村部では，男性の交友頻度が相対的に低い。また，都市部に認められたような家族形態による差はほとんどなく，［独居］女性も，配偶者を含む他の家族と同居している人も，似たよ

うな親密度で交友している。農村部では，家族との同居の有無よりも性差の方が，交友頻度を規定する大きな要因である。

従来，都市高齢者の社会関係に関する諸調査では，「1人暮らし高齢者は他の家族形態の高齢者よりも近隣関係が豊富であり，友人関係の比重も高い」という知見が確認されてきている[12)]。今回，近隣関係では［独居］者と［夫婦］高齢者に有意差は認められなかったが，このことは逆に，［独居］女性の近隣関係が［夫婦］高齢者に劣らず豊かであることを示している。他方，友人関係では都市部の［独居］女性について上記知見を確認できた。1人暮らし高齢者の「社会的孤立」が，女性に関しては国分市でも該当しないことを，確認することができたというべきであろう。

3）都市部女性における友人・近隣関係の特色

これまで見てきたように，都市部の［独居］女性は，友人数は相対的に少ないが交友頻度が高く，さらに，［よく］および［時々］家を行き来する近隣づき合いが8割を越す。このように頻繁に近隣と行き来しながら，その7割近くの人が週1，2回以上，友人と交流していることになる。

一般に友人関係は，個人が，社会的諸関係を持つ人々の中から，特定の他者を主体的に選択して形成するものであり，個人が培ってきた社会関係における能動的側面が，全面的に表出する場である。それ故に，友人関係は，個人の学歴・収入・職歴や，これに関連して個人の周囲に配置された社会諸関係の規模や性格，当人のパーソナリティなどに大きく左右される。社会集団論では，近隣と友人は共に第一次集団に含められているが，ボランタリーで個人的要素が強いという点で友人関係は，「地縁」や「住縁」により時には「結ばざるを得ない」ことも多い近隣関係とは性格が異なる，主体的・選択的なネットワークである。

このように本質的に性格の異なる2種類の社会関係が，それぞれに高い密度で，都市部の独居女性達において併存していることの意味をどう理解すればよいだろうか。まずは，親密で頻繁な近隣関係と，空間的に離れた友人との親密な交流が，彼女たちにおいて相互促進的な作用を及ぼしている，と解釈することができる。しかし他方で，近隣の中に友人がいる人も多いだろう。近隣のかなりの人が友人と重複しているからこそ，性格の異なる社会関係が同時に存在していると見ることもできる。交流頻度の高い2種の社会関係が高比率で存在していることからして，筆者としては後者の解釈をとりたい。

とすれば，国分市都市部の独居高齢女性を取り巻く社会的ネットワークの特徴

を，次の２つの位相で捉えることができる。

１つは，独居女性における友人志向の位相である。上記の実態は，地域で高齢者が，長期にわたり同じ近隣に取り囲まれて居住する間に，漫然と親密な近隣づきあいになっていくという，社会関係の自然成長的側面としてだけで理解すべきではない。同じように親密であっても，その相手を「友人」と認識するか「近隣」と呼ぶかで，当人にとって関係の意味は異なる。相手を「友人」と認識することは，当人が時間をかけて近隣の中から特定の人を友人として選択している，ということである。ここでは，独居女性達の社会関係形成における個別的で選択的な，その意味において都市化しつつある側面と捉える。

もう１つは，都市部の独居女性が自己防衛として近隣づきあいを配置しているという，近隣志向の位相である。今日では農村部の親密で頻繁に行き来する近隣関係は，高齢者のみ世帯の増加という高齢化状況に対する，高齢者ぐるみ・地域ぐるみのケア・システムの役割を自ずと果たしている。農村部において，近隣づきあいの親密さに家族形態による差が見られなかったのは，近隣関係のこのような機能を示している。これに対し，都市化の進行によって地域空間と住民構成の変動性の高い都市部では，従来までの自生的な相互ケア・システムとしての近隣関係は，弛緩せざるを得ない。そのような事態に対処するために，独居女性が自己防衛的に，自らの周囲に近隣という網の目を張り巡らせているのではないだろうか。

このように理解すると，都市部女性における親密な近隣づきあいの実相も意識的に再形成されているのであって，自生的で伝統的な農村的要素の名残として捉える必然性はない。友人志向と近隣志向の差は，対象の個別的選択か集団的選択か，あるいは主体の選択基準や選択意思がどのくらい明確か，であると言える。そして，都市部の独居女性の社会関係においては，近隣志向と友人志向が交錯し，重複した状況にあると見ることができるだろう。

４．高齢者の余暇・趣味活動と社会的ネットワーク

表12を見ると，友人数の多さは交友頻度や近隣関係と有意関連し，趣味数・趣味活動の全ての類型や諸講座への参加とも関連している。趣味への関心は講座という集団的活動の場への積極的参加に発展する可能性があるので，講座参加や趣味活動はそれを通じて友人を作る機会を増やす。さらに，友人数が増えることは，趣味活動や講座に誘い出してくれる人が増えることである。まさに，友人数の多

表12：活動参加と社会関係の相関係数

	趣味数	健康型	教養型	娯楽型	ゲートボール	諸講座	友人数	交友頻度
友人数	0.217++	0.174++	0.090+	0.211++	0.160++	0.193++		0.540++
交友頻度	0.042	0.014	0.001	0.073	0.075	0.020		
近隣関係	0.076	0.009	0.069	0.034	0.069	0.042	0.101+	0.124++

+は危険率5％以下，++は1％以下である。

さは高齢者の余暇・趣味活動の積極性を作り出していくのである。表12からは，個々の高齢者の趣味活動における豊かさが，多くの友人との交流を通じて生まれていることがわかる。

ところで，このことに関わる分析で明らかになったのは，都市部の男性における余暇・趣味活動の活発性であり，都市部男性における友人を持つ人や友人数の多さであった。表13は，近隣志向の強いグループ，友人志向の強い都市部男性，及び都市部独居女性における余暇活動の活動性を比べたものである。ここで［近隣志向］グループとは，近隣関係［親密型］および［標準型］・友人数［なし］を基準にして抽出した25人である。データ数が少ないので一般化することはできないが，これによると，述べたような余暇活動を通じての豊富な友人形成，あるいは多くの友人との交流に導かれての豊かな余暇活動というのは，現時点では確かに，都市部の男性に顕著な傾向であるに留まっている。［近隣志向］グループの余暇・趣味活動の活発性は都市部男性や全体水準よりも低い。しかし，友人数は男性より少なくとも，頻繁な交友関係と親密な近隣づきあいを特徴とする都市部の独居女性を単純に統計上で見ると，その余暇・趣味活動の活発性水準は，［近隣志向］グループよりもさらに低いのである。

都市部独居女性たちの親密な交友や近隣づきあいが，その余暇・趣味活動の積極性とは直接的な関連が弱いのは，なぜだろうか。これは1つには，後期高齢者が圧倒的に多いという彼女たちの年齢構成から説明することができる。

他方で，趣味数ゼロと4個以上の人が比率において拮抗しており，両者併せて4割を越えている事実（表13）は，余暇活動の活発性において彼女たちの間での両極分化も激しいことを示す。このことから，もう1つの仮説的説明ができるだろう。それは，都市部女性の社会的ネットワークにおいては，包括的な近隣関係中心から個別的で選択重視の友人関係中心へという比重の移動過程にある，ということである。趣味活動が本質的に個人の選好中心に展開される事柄である以上，趣味活動を通じて強化されていくのは，近隣関係ではなく友人関係であろう。自

表13：回答者の概要

	近隣志向(25人)	都市部独居女性(54人)	都市部男性(69人)	全　体
前期高齢者比	32.0%	23.1%	42.2%	41.7%
平均趣味数	2.36個	2.3個	3.7個	2.65個
①趣味数0個	8.0%	18.9%	3.1%	12.8%
②趣味数4個以上	24.0%	22.7%	51.6%	29.0%
③ゲートボール	48.0%	26.4%	60.9%	46.1%
④娯楽型	32.0%	35.8%	68.8%	48.8%
⑤教養型	52.0%	49.1%	56.3%	46.4%
⑥諸講座参加	24.0%	34.0%	76.6%	44.6%
②～⑥の合計－①	172.0	149.10	311.0	202.1

由時間が増加し，家族内役割の遂行という「拘束」からも解放されつつある都市部の独居女性たちが，余暇・趣味活動による生活の充実を志向するとすれば，友人関係の比重は高まらざるを得ない。社会関係のベクトルが近隣志向から友人志向へ転換し活発な層と，近隣志向に留まり不活発な層の分立・併存が，都市部独居女性の一見不活発な余暇活動の活動性水準を作り出している，というのが，現時点における筆者の解釈仮説である。

舞鶴大学受講者を対象とするこの調査を通じて，国分市の高齢者の余暇・趣味活動の活発な実態が明らかになった。高齢者は近隣関係・友人関係ともにきわめて親密であり，豊富な社会的ネットワークを張り巡らせている。また，分析を通じて，友人関係の豊かさが余暇・趣味活動の活発性と密接に結びついており，都市部の男性にこの傾向が顕著であることがわかった。さらに，都市部独居女性の余暇・趣味活動の水準においては，近隣関係から友人関係へ，という社会的ネットワークの比重移動の過程にある，という推測がなりたつ。この推測については，今後の高齢者における社会的ネットワークの質・量・性格のより精緻な調査を通じて，検証していく必要がある。

なお，今回の調査は国分市教育委員会の協力を得て行うことができました。舞鶴大学という調査の場と貴重な時間を提供していただいたことにつき，同教育委員会に心から感謝いたします。

［註］

1）総務庁編『高齢社会白書 H９年』（大蔵省印刷局，1997年，９頁）表６-２-３によると，1995年における要介護等の高齢者は，65歳以上人口の8.23％である（兵庫県を除く）。また，『国分市高齢者保健福祉計画』（国分市，1994年）では，要援護高齢者は65歳以上人口の11.1％と推計されている。

2）例えば，東京都立大学都市研究センターによる東京都目黒区・台東区の高齢者対象の「大都市高齢者の文化創造に関する調査」（高橋勇悦他『総合都市研究』39号，1990年），東京23区の高齢者対象の「大都市高齢者の新しい生活スタイルに関する調査」（高橋勇悦『総合都市研究』46号，1992年），長寿社会開発センターの「世田谷区高齢者の実態調査」（高橋博子『都市高齢者の日常生活と社会参加―世田谷区高齢者の実態調査報告書』長寿社会開発センター，1995年），昭和女子大学女性文化研究所による東京都世田谷区の高齢者対象の「高齢者調査」（伊藤セツ「高齢者のレジャー享受能力・文化活動能力と地域」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』19号，1992年）など。

3）1995年国勢調査では，鹿児島県の世帯規模は2.54人で東京都の2.34人に次ぐ小規模であり（全国平均2.82人），高齢者の三世代同居率は9.2％（全国平均26.7％），独居世帯31.1％（全国17.2％），夫婦のみ世帯34.3％（全国23.8％）である。

4）通常，人口の男女比では男性の方が少なく，1995年国勢調査では女100につき全国レベルで男96.2，鹿児島県レベルで96.2であるのに対し，国分市では102.3となっており，男性の方が多い。明らかにこれは，京セラ・ソニー・自衛隊などに男性従業者が多く，工業大学学生も多いことに起因している。

5）1999年３月現在の住民登録ベースでは，高齢化率は社宅や公営住宅の多い住宅地域での8.4％から，学生アパートと高齢者の１人暮らしや夫婦のみ世帯の多い市街地中心部の20.7％，中山間部の過疎地域での42.5％・56.8％と，格差が大きい。

6）この調査での仕事や経済状況に関する質問は，回答者の階層評価の目安として設けたものだが，この目的には役立っていない。働いている人の職歴を見ると，農業従事者や自営業者が多い。従って，回答者の「仕事」の多くは，現役時の農業や自営業における労働の延長としての「仕事」，家庭菜園や自分の田畑での野菜作り，家事遂行としての「仕事」などであることが推測される。

7）内野澄子「趣味・娯楽活動の人口学的特徴」『統計』vol.42，1991年，26～27頁。

8）ちなみに，1990年に行われた東京都下の老人クラブ会員対象の調査では，［ゲートボール等］を趣味とする人は33.5％（男37.4％・女27.5％），［園芸・盆栽］は35.8％（男38.0％・女32.4％）であり，［野菜作り］の項目はない（日本チャリティ協会「第４回高齢者のくらしと考えについての実態調査」，伊藤セツ「高齢者のレジャー享受能力・文化活動能力と地域」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』19号，1992年，41頁，表３-３）。また，『レジャー白書98'』（余暇開発センター，1998年）によると，60代以上の男性のゲート

ボール参加率は6.2%，女性は４%に過ぎない。園芸・庭いじりは趣味・創作部門で60代以上の中で最も人気ある項目だが，野菜作りは余暇活動の項目には挙げられていない。

9）参考までに鹿児島市の『高齢者生活意識調査報告書』（1990年）では，［親しくつきあう］66.7%，［世間話程度］15.6%，［挨拶のみ・つき合い無し］17.7%である。鹿児島市のこの数値自体，近隣関係のきわめて親密な地域性を示しているが，国分市の事例は，それ以上に親密である。これは，回答者の伝統的な近隣づきあい重視の傾向が表われていると，見ることもできる。しかし，後にも述べるように，地域社会環境や家族環境の変化の中で，意識的に再編成されてきた近隣関係という見方も可能であろう。

10）通常，都市の近隣関係の段階別類型化では，［会えば世間話］が最も多いことから，①［よく行き来する］と［時々行き来する］，②［会えば世間話］，③［会えば挨拶程度］と［つき合いなし］にグルーピングすることが多い。しかし筆者の調査では①グループに偏っていたため，このように区分した。したがって，親密型と標準型の差は類型の名称ほどには大きくない。

11）回答者の大半が老人クラブ加入者なので，もともと友人数が少なくないことは十分予想されたが，この数は少々多すぎるように感じられる。これは，友人知人どおし誘い合って出席している会場での記入という調査方法が影響して，多い目の回答になっているのではないだろうか。

12）金子勇『都市高齢社会と地域福祉』ミネルヴァ書房，1993年，99頁。この理由について金子は，職場や家族内部での役割が縮小する高齢期には，その代替を地域や近隣との交流に求めるようになるが，独居高齢者の場合，家族内部で果たすべき役割がないので，この傾向が一層強くなる，とする。確かに都市高齢者の間で比較する限りでは，縮小したとは言え家族内役割を未だ持つ家族同居高齢者との違いとして，独居高齢者の社会関係の豊かさは説明できる。しかし，同様に家族規模が縮小し，高齢者の家族内役割の縮小している農村部ではなぜ，都市部のように家族形態による差がないのかは，金子の解釈では説明できない。